お別れのご挨拶

高橋前会長の後を受け継ぎまして恒友会の会長を務めることになりました 6 回生の北村でございます。どうぞ宜しくお願い致します。

本日は、一橋大学名誉教授　関恒義先生のお別れ会に、このように大勢の皆様にご出席頂きましてありがとうございます。これだけの人数が集まりましたのは、恒友会始まって以来のことで、関先生は「君達よく来てくれたな」と、きっとお喜びになっておられることと思います。

既にご案内の通り、関恒義先生におかれましては、聖路加国際病院にて療養中でございましたが、その甲斐なく 10 月 23 日ご逝去になられました。

享年満 89 歳、数え年で申しますと 90 歳でございました。日本人男性の平均寿命は 79 歳だそうでございますので、それより 10 年長生きなさった関先生は天寿を全うされたと申して宜しいかと存じます。関恒義先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

ご葬儀は、諸般の事情から家族葬としてお身内だけで執り行われました。

私たち恒友会員は、直接先生にお別れすることが出来ませんでしたが、本日、先生のご長男の関文秀様にもお出で頂きまして、恒友会として関先生のお別れ会を催すことになりました。

先生がお亡くなりになる１ヶ月少し前の９月 13 日に、４回生の茂住さん、5 回生の高橋さん、薮田さんと私の ４ 名で井上病院に入院中の先生をお見舞いに伺いました。その時の面会が最後のお別れとなりました。先生は私たち一人ひとりを確認するように指さして頷(うなず)いておられました。そして全員と握手をして嬉しそうにしておられたのが印象に残っています。

ここで一橋大学における関先生の学者として・教師としての業績についてのご紹介するのが恒例ですが、何分にも私は不肖の弟子でございまして、卒業以来先生の著作なり論文を読んで勉強することを怠って参りましたため、その資格も能力もございません。それに代わりまして、本日皆様に「関恒義名誉教授 略年譜」と大学院生だった盛田常夫氏のブログ「追悼 関恒義名誉教授」をプリントしたものをお渡ししました。そこに関先生の業績が簡潔ながらも詳しく記されておりますので、そちらをご覧頂きたいと思います。

ゼミナールに関して申しますと、関ゼミナールの一番の特徴は、指導教官としての関先生は、右も左も包容するおおらかさであったと思います。

恒友会の会誌である「恒友」第３号で関先生は次のように書いておられます。

「関ゼミでは、近経とマル経の双方を、したがって経済学を全面的に学習することを義務づけている。一方の知識しかもたない人は経済学的には“かたわ”である。」

そして、関先生は「関ゼミからは、･･･多才な人材が育っていった。この点はゼミ担当者として誇りに思っている。」と述べられております。

関ゼミは、昭和 32 年に始まり、定年退官された昭和 63 年まで 31 年にわたり、延べ 200 人の学生をご指導になりました。そして、大部分の人は実業界へと出て行きましたが、学部から大学院に進み学者・研究者になった人も大勢おります。また、国や地方の公務員になった人もいますし、卒業後医学を目指して医学部に進み医師になった人、女流マンガ家になった人などの変り種も出るなど、本当に多才な人材をお育てになりました。

ゼミナール以外でも、初期の時代には当時多摩蘭坂にあった官舎に押しかけてすき焼きをご馳走になりお酒を飲ませて頂いたことがありました。先生のご家族には大変ご迷惑だったことと思いますが、関ゼミの家族的雰囲気を伝える懐かしい思い出でございます。そして、やはり初期の時代には鬼怒川や裏磐梯へのゼミ旅行に先生のご家族もご一緒に参加されたと伺っています。

それから、関先生は、ゼミ会誌「恒友」の発刊をとても誇りにしていました。「他のゼミにはこういう物を出しているところはないぞ」とおっしゃって、ゼミ生及び OB の纏まりの良さを自慢なさっておられました。井上病院に入院しておられた時も、手元に「恒友」を置いておかれて、しばしば手にとってご覧になっておられたのが印象に残っています。

このように、私たちに楽しいゼミナール生活の思い出を残して頂いた関恒義先生、お酒のお好きだった関恒義先生を懐かしく偲びながら、本日は関先生とのお別れを致したいと思います。

拙い挨拶でございましたが、これをもちまして関恒義先生お別れ会の挨拶とさせて頂きます。